

松江市文化財調査報告書 第193集

大橋川改修に伴う個人住宅移転予定地内発掘調査報告書2

朝 酗 矢 田 遺 跡

令和元（2019）年12月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

松江市文化財調査報告書 第193集

大橋川改修に伴う個人住宅移転予定地内発掘調査報告書2

朝 酌 矢 田 遺 跡

令和元（2019）年12月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　　言

1. 本書は、平成30年度に実施した、大橋川改修に係る個人住宅移転に伴う朝鈴矢田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、松浦郁雄氏から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

名 称 朝鈴矢田遺跡
所在地 島根県松江市朝鈴町 1084

4. 現地調査の期間及び報告書作成期間

(現地調査) 平成30年8月2日～平成30年8月28日

(報告書作成) 令和元年9月1日～令和元年11月30日

5. 開発面積及び調査面積

開発面積：305.814m²

調査面積：110.2m²（内 4.9m²は試掘調査）

6. 調査組織

【平成30（2018）年度】現地調査

主 体 者	松江市教育委員会	教 育 長	清 水 伸 夫
調査指導	島根県教育庁	文 化 財 課 主 幹	勝 部 智 明
事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長	藤 原 亮 彦
		次 長	永 田 明 夫
"	まちづくり文化財課	課 長	飯 塚 康 行
"	" 埋蔵文化財調査室	室 長	宮 本 英 樹
"	" 埋蔵文化財調査室	調 査 係 係 長	川 上 昭 一
"	" "	学 芸 員 三 宅 和 子	
"	" "	嘱 託 門 脇 誠 也	
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長	星 野 芳 伸
	埋蔵文化財課	課 長	赤 澤 秀 则
	" 調査係	主 任	江 川 幸 子 (担当者)
	" "	嘱 託	北 島 和 子 (補助員)

【令和元（2019）年度】報告書作成業務

主 体 者	松江市	市	長	松浦 正敬
事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部	長	須山 敏之
	"	次	長	比田 誠
	"	"	稻田 信	
	まちづくり文化財課	課	長	飯塚 康行
	"	埋蔵文化財調査室	長	宮本 英樹
	"	調査係	長	川上 昭一
	"	"	学芸員	三宅 和子
	"	"	嘱託	門脇 誠也
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長	星野 芳伸	
	埋蔵文化財課	課 長	赤澤 秀則	
	"	調査係 主 任	江川 幸子 (担当者)	
	"	"	嘱託	北島 和子 (補助員)

7. 調査に携わった発掘作業員

井川智、井川洋、加藤恵治、坪倉ひとみ、深津靖博、峰谷一雄

8. 本書に記載した遺物の洗浄・復元・実測・浄書、遺構図版の作成は以下の者が行った。

塩田陽子

9. 現地調査及び本書の作成にあたっては次の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。
記して感謝の意を表する（敬称略、順不同）。

広江耕史（島根県埋蔵文化財調査センター文化財保護主任）、柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター嘱託）、内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター臨時職員）、朝鈴町矢田自治会・朝鈴矢田生産森林組合

10. 本書の執筆は第1章を松江市埋蔵文化財調査室が、そのほかを江川が執筆した。また、編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て江川が行った。

11. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。

12. 本書における遺構ほかの記号は以下のとおりである。

SP：小土坑 SK：土坑 SD：溝 SX：性格不明の遺構 SE：井戸 SF：道

13. 本書で掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを明記した。遺物（土器）実測図の縮率は原則1/3とし、断面は土師器・陶磁器・瓦を白抜き、須恵器を黒塗りで示した。

14. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市で保管している。

15. 本書を作成するにあたり、編年などについて下記の参考文献を利用した。

陶磁器（九胸編年）『九州陶磁の編年—九州近世陶磁器学会』2000

青花（小野分類）小野正敏 1985『出土陶磁よりみた十五、十六世紀における画期の素描』

『MUSEUM』No.416、東京国立博物館

目 次

例言

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1

第2章 位置と環境.....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	4

第3章 調査の報告.....	8
第1節 調査地の現況.....	8
第2節 調査の概要.....	8
第3節 遺構と遺物.....	14
第4節 旧地形の調査.....	23

第4章 総括.....	25
-------------	----

遺構観察表.....	27
------------	----

遺物観察表.....	28
------------	----

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	市道開発範囲と朝酌矢田遺跡の位置 (S=12,000)	2
第 2 図	島根県・松江市と朝酌矢田遺跡	3
第 3 図	朝酌矢田遺跡位置図 (空中写真)	3
第 4 図	朝酌矢田遺跡と周辺の遺跡 (S=1 : 25,000)	5
第 5 図	朝酌矢田遺跡位置図 (S=1 : 5,000)	7
第 6 図	調査範囲・グリッド設定図 (S=1 : 400)	9
第 7 図	調査成果図・コンタ測量図 (S=1 : 300)	10
第 8 図	調査成果図 (S=1 : 150)	11
第 9 図	調査区セクション図 (1) (S=1 : 60)	12
第 10 図	調査区セクション図 (2) (S=1 : 60)	13
第 11 図	SA100・SF73 遺構図 (S=1 : 60・S=1 : 40)	14
第 12 図	SA101 遺構図 (S=1 : 60・S=1 : 40)	15
第 13 図	SX01 遺構図 (S=1 : 40)	16
第 14 図	SE59 遺構図 (S=1 : 40)	17
第 15 図	遺構平面・断面図 (1) (S=1 : 40)	18
第 16 図	遺構平面・断面図 (2) (S=1 : 40)	19
第 17 図	遺構平面・断面図 (3) (S=1 : 40)	20
第 18 図	遺物実測図 (1) (S=1 : 3・S=1 : 4)	21
第 19 図	遺物実測図 (2) (S=1 : 3・S=1 : 2)	22
第 20 図	T1～T5 での砂層検出状況 (S=1 : 40)	23
第 21 図	遺物実測図 (3) (S=1 : 3)	24

挿表目次

第 1 表	遺構観察表	27
第 2 表	遺物観察表	28

本文中写真目次

写 真 1	朝酌矢田遺跡空中写真 (1947年)	1
写 真 2	作菜風景	8
写 真 3	調査指導風景	8

写真図版目次

図 版 1 上	調査地全景 (調査前) (北から)
図 版 1 下	調査地全景 (調査後) (南西から)
図 版 2 上	完掘状況① (北東から)
図 版 2 下	完掘状況② (北東から)
図 版 3	完掘状況③ (北西から)
図 版 4	完掘状況④ (南西から)
図 版 5 上	試掘調査 T6 遺構平面プラン検出状況 (北から)
図 版 5 下	南辺 F-G ラインセクション (南西から)
図 版 6 上	ピット列 SA100 と道 SF73 (東から)
図 版 6 下	ピット列 SA101 (北から)
図 版 7 上	柱穴 SP38 の柱根検出状況 (南から)
図 版 7 下	柱穴 SP64 の半截状況 (南から)
図 版 8 上	性格不明の遺構 SX01 遺物出土状況 (北西から)
図 版 8 下	井戸 SE59 半截状況 (南から)
図 版 9 上 右	T1 土層断面
図 版 9 中 左	T2 土層断面
図 版 9 中 右	T3 土層断面
図 版 9 下 左	T4 土層断面
図 版 9 下 右	T5 土層断面
図 版 10	出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

松江市朝酌町 1084 番地の畠地において、大橋川拡幅改修事業に伴う個人住宅移転工事が計画された。これに伴い平成 29 年 12 月 7 日付で事業者より試掘調査依頼書が松江市埋蔵文化財調査室に提出された。

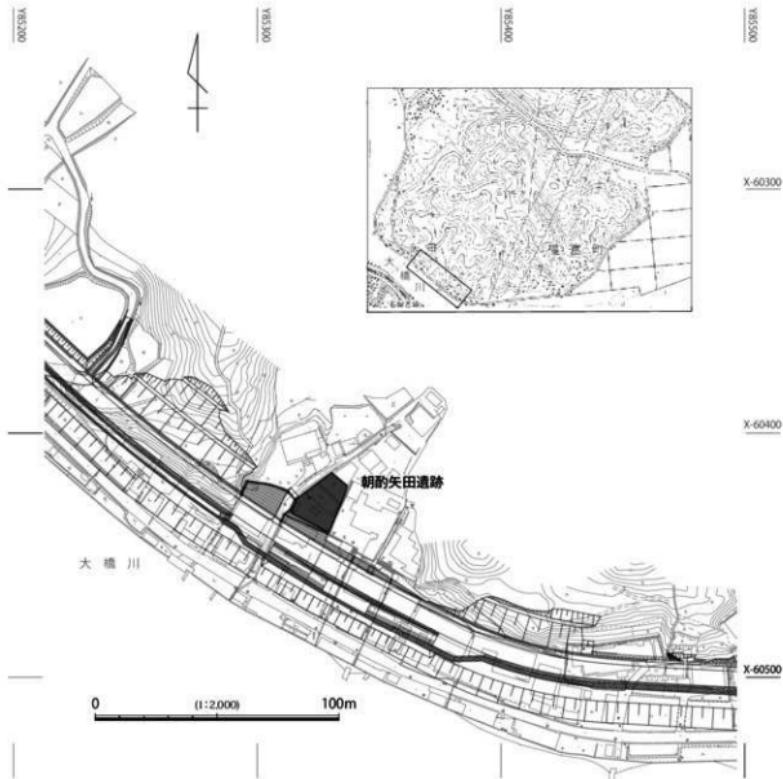
平成 30 年 1 月 19 日、開発予定地中央に 1 ケ所のトレンチ (T6) を設定し、試掘調査を行ったところ、現況地表面下 20cm で地山を検出、柱穴 7 基、土坑 1 基が検出された（第 8 図）。SP74 より土師器、SK75 より須恵器が出土したことから、当該地に遺跡が存在すると判断した。



写真 1 朝酌矢田遺跡空中写真（1947 年）
<http://maps.gsi.go.jp/maplitSearch.do?specificationId=1185043>

この結果を受けて、平成30年5月31日、文化財保護法に基づいて事業者から遺跡発見の届出が市埋蔵文化財調査室を通じて島根県教育委員会宛てに提出された。これに対し、6月20日、県教育委員会からは、住宅新築部を囲繞する擁壁設置範囲について、工事着手前に本調査を実施するよう通知があり、事業者に伝達した。

この後、事業者より本発掘調査の依頼書が提出され、平成30年8月2日～平成30年8月28日の期間、現地で本調査を実施することとなった。



第1図 市道開発範囲と朝駒矢田遺跡の位置 (S=1:2,000)

第2章 位置と環境

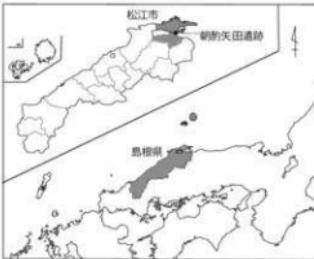
第1節 地理的環境

東西に細長い島根県の北東部には、東西長 65km の島根半島がある。島根半島は北を日本海、東を美保湾、南を宍道湖と大橋川、中海に囲まれ、西の出雲市で本土とつながり、日本海の北約 50km に隠岐諸島がある。現在では弓ヶ浜半島により中海と美保湾が隔てられているが、奈良時代には弓ヶ浜半島はまだ島であり、日本海が大きく湾入していた（第2・3図）。

松江市は島根半島の東側約半分と、これとほぼ同じ面積の本土側の土地を合わせ持つ。

朝酌矢田遺跡は、島根半島と本土を分かつ大橋川が川幅を最も狭めるところの島根半島側、朝酌町矢田に位置している。標高 114.1m の独立丘陵の南の山麓部にあたり、標高 3.5m 付近の緩斜面にあって、大橋川からの距離は 50m 程度である。

このあたりは丘陵が大橋川まで迫り平地の面積は極めて少ないが、川沿いには民家が建ち、丘陵の傾斜地には畑、狭い谷筋には水田が作られている（第4・5図）。



第2図 島根県・松江市と朝酌矢田遺跡



第3図 朝酌矢田遺跡位置図（空中写真）

第2節 歴史的環境

1. 朝酌矢田遺跡周辺の遺跡

島根半島の中海沿岸では縄文時代の遺跡が数多く知られており、近年の発掘調査の成果により、中海と宍道湖を結ぶ大橋川線辺部でも遺跡の発見が相次いでいる。

また、733年に編纂された『出雲国風土記』によれば、大橋川が最も川幅を狭めているところ（朝酌促戸）には出雲国と隱岐国を結ぶ枉北道の朝酌渡があり、漁労が盛んに行われて市がたっていた様子が詳細に描かれている。これらの内容は現時点では遺構としては具体的に証明されていないが、朝酌を中心とする大橋川一帯は古代においても特に重要な場所であったと考えられている。

ここでは朝酌町を中心として各時代の遺跡について述べる。

縄文時代 朝酌菖蒲谷遺跡の低地部（6）で中期末～後期初頭のドングリ類の貯蔵穴 1 基、大井町の九日田遺跡（25）で後期初頭を中心としたドングリ類の貯蔵穴 19 基を含む計 23 基の土坑が検出され、シコノ谷遺跡（2）では早～晚期、福富松ノ前遺跡（3）では晩期の遺物が高い密度で出土している。若宮谷遺跡（5）は調査が継続中であるが、現時点では晩期の遺物が出土している。また、大橋川南岸にある官道下遺跡（28）の自然流路跡から後～晚期を中心とする土器が出土している。

弥生時代 弥生時代の遺跡は少なく、九日田遺跡と福富松ノ前遺跡から前期の土器が少量出土している。後期では魚見塚古墳（9）の墳裾から竪穴建物跡が検出されており、キコロジ遺跡（10）から少量の土器が出土している程度である。

古墳時代 前期では、朝酌菖蒲谷遺跡の傾斜地で土器植墓と方墳の周溝状の溝が検出されている。

中期に入ると宍道湖線辺部に規模の大きい古墳が一定の間隔を保って築かれるようになり、その一環として朝酌川沿いに観音山古墳群（16）や廐所古墳（地図外）といった古墳が築かれている。観音山 1 号墳は一辺 40m 前後の方墳で、葺石と埴輪を持ち、大刀類や銅鏡などが出土し、廐所古墳は一辺 60m 前後の方墳で、造出しがあり、葺石と円筒・形象埴輪を持つことが知られている。

後期に入ると茶臼山の西麓に大庭廐塚古墳（42）や、山代二子塚古墳（41）、山代方墳（40）、永久宅後古墳（43）といった規模の大きな古墳が集中して築かれ、出雲地域統一の動きがみられる。朝酌町でも全長 61m の前方後円墳、魚見塚古墳が築造され、朝酌岩屋古墳（12）は墳丘が一部しか残存しないが、切石の整美な石棺式石室を持ち、玄室の内壁には現在も赤色顔料が残る。このほか朝酌上神社跡古墳（13）、旧朝酌小学校校庭古墳（14）、5 基からなる九日宮古墳群（地図外）、阿弥陀寺古墳（4）が築造されており、いずれも小規模ながら主体部に石棺式石室（亜流を含む）を持つことに共通点が見られる。廐原古墳群（15）は大半が消滅しているが、本来は 10 基以上の横穴式石室を持つ古墳からなる群集墳と伝えられ、このうちの 1 号墳は一辺 10m の方墳で、横口式石郭を持つ特異な終末期古墳として知られている。

朝酌地域に古墳群を築いた人々の集落遺跡としては、キコロジ遺跡周辺が有力と考えられる。キコロジ遺跡では主頭大刀の柄頭や漆の付着した容器などを含む大量の遺物が、北東方向にある天井遺跡



- | | | | | |
|-----------|--------------|---------------|------------|----------------|
| 1 矢田道跡 | 12 利野西原古墳 | 23 大井古墳群 | 34 間内越塙古墳群 | 45 高白山古墳群 |
| 2 シコノ谷道跡 | 13 利野上神社古墳 | 24 奇尾古墳 | 35 来鹿塙墓 | 46 山田道跡 |
| 3 墓塙松ノ筋道跡 | 14 三瀬的小学校前古墳 | 25 久日道跡 | 36 山代城南新道跡 | 47 大野道跡 |
| 4 何佐松古墳 | 15 里原古墳群 | 26 泊ノ底古道跡 | 37 出雲四國分寺跡 | 48 東加茂古墳 |
| 5 宮谷山道跡 | 16 駒首山古墳群 | 27 イガラヒ道跡・吉嶋群 | 38 出雲国分寺跡 | 49 下集田道跡 |
| 6 利野高瀬谷道跡 | 17 駒少林遺跡 | 28 宮道下道跡 | 39 集田1号墳 | 50 山代城南新道跡・瓦窯跡 |
| 7 利野高瀬谷道跡 | 18 若夕葉跡 | 29 露道跡 | 40 山代方塚 | 51 山代城南新道跡 |
| 8 魚貝塙道跡 | 19 ハリタケ遺跡 | 30 石屋古墳 | 41 山代二子塙古墳 | 52 大野道跡 |
| 9 魚貝塙古墳 | 20 船谷集落跡 | 31 石台古墳 | 42 大野跡古墳 | 53 出雲道跡 |
| 10 キコロ道跡 | 21 御平櫛穴道群 | 32 横舟道跡 | 43 久久毛古墳 | 54 大野敷道跡 |
| 11 天井道跡 | 22 山谷古墳 | 33 手原古墳 | 44 山代堀正古墳 | 55 鹿庄町道跡 |

第4図 朝酌矢田遺跡と周辺の遺跡 (S = 1:25,000)

(11) や南東の丘陵から流れ込んだ状況で出土している。

一方、朝酌町の北東に位置する大井町では5世紀末には廻谷窯跡(20)で須恵器生産が開始されている。操業は9世紀まで継続されており、その内6~8世紀の間は出雲地域の須恵器生産を独占している。この頃の窯跡には寺尾窯跡(24)、ババタケ窯跡(19)、岩汐窯跡(18)などがある。須恵器工人の集落は別所遺跡や鶴沢A遺跡(地図外)、墓は池ノ奥C、D遺跡(26)の周辺とされており、陶棺墓が検出されている。須恵器生産を統括していたと目される人物の古墳は、窯跡近くに位置して朝酌地域とは主体部の形態を異にする、山巻古墳(22)やイガラビ古墳群(27)などと考えられている。

古代 出雲国では7世紀末には意宇平野に国庁(出雲国府跡・53)が設置され、魚見塚遺跡(8)では国庁の北の十字路から発して隱岐國へ向かう官道跡(枉北道)が検出された。その沿線にあるキコロジ遺跡では9世紀初頭までの遺物が多く出土しており、漆容器や挽物の漆器椀のほか、綠釉陶器などの出土から、手工業生産集団と有力者層の存在が窺える。朝酌菖蒲谷遺跡でも8~9世紀の多数の土器を伴う遺構が検出され、集落跡が見つかっている。

大井町では引き続き須恵器生産が継続されており、イガラビ遺跡(27)や池ノ奥A遺跡(地図外)では円面鏡や水滴が出土して官衙的様相がみられ、鉄鉢形土器や托など仏教関連遺物も出土している。

中世 意宇平野が引き続き中世府中として出雲国を中心となり栄えている。

朝酌町周辺では、岩沙峠遺跡(17)で16世紀頃の石で囲われた一字一石経塚、三大寺遺跡(地図外)では13基からなる古墓群が検出されている。山城としては和久羅城跡(地図外)が築かれている。

2.『出雲国風土記』にみえる朝酌促戸の様子

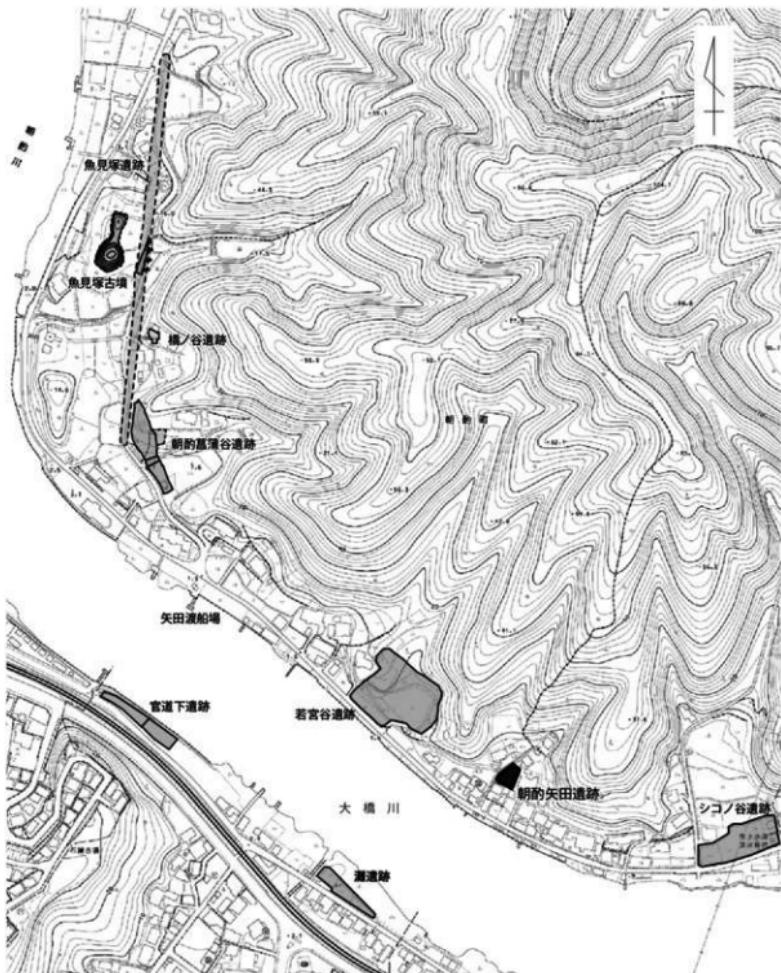
733年に編纂された『出雲国風土記』(以下『風土記』)には、朝酌地域の奈良時代の様子が、島根郡条に詳しく述べてあるので以下に訓讀文を掲載し、簡単に説明を加える。

【訓讀文】 朝酌促戸。東に通道あり、西に平原在り、中央に渡り。即ち、筌を東西に亘し、春秋に入れ出だす。大きき小さき雜魚、臨時に來湊りて、筌の邊に騎り駆り、風压し水衝く。或は竿を破壊り、或は日魚と製りて、鳥に捕らる。大きき小さき雜魚・浜藻、家に闇ち、市人四より集ひて、自然に塵を成せり。〔茲より東に入りて、大井浜に至る間の南と北との二の浜には、並びに日魚を捕る。水深し。〕(中略) 朝酌渡。広さ八十歩許なり。国 庁より海邊に通ぶ道なり。

朝酌促戸とは朝酌地域の大橋川が川幅を狭めているところ大橋川北岸一帯を指す。そこには東に道があって、西には原があり、その間に渡し場がある。この渡し場が朝酌渡のことで、出雲国府と隱岐國府を連絡する、枉北道の渡河区間にあたる。

また、筌漁が行われてたくさんの魚が捕れ、海藻にも恵まれていたようである。自然と市がたち店ができていたということであるから、海産物だけではなく、様々な物資が対象となっていたことが窺われる。また、朝酌渡の東、大井浜に至る間の2浜でも漁労が行われている。さらに中海沿いを東西へ進むと、国内外から人々が集まっていたとされる歌垣の場、邑美冷泉と前原崎に至る。

朝酌促戸は国庁が置かれた意宇郡と島根郡を結ぶ官道が通る場所であるとともに、中海と宍道湖を結ぶ水上交通の要衝であり、多くの人や物資が往来する場所であったことが想定されている。

第5図 朝酌矢田遺跡位置図 ($S = 1:5,000$)

【第2章 註】

1.『出雲國風土記』の訓読文は、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著 2005『出雲國風土記』山川出版社から引用した。

【第2章 参考文献】

島根県古代文化センター編 2014『解説出雲國風土記』

松江市史編集委員会 2013「古代・中世Ⅰ」『松江市史』史料編 3 他

第3章 調査の報告

第1節 調査地の現況

朝鈴矢田遺跡は標高3.1～3.9mの緩斜面にあり、南西方向が低い地形にある。本遺跡の現況は畠地で、耕作土には須恵器や陶磁器、瓦の破片が散見された。東と南側には家が建ち、土地境界には簡易な側溝が設けられている。西に隣接する道路は前年度に拡幅され、境界には深い側溝が新設されている。畠の中央西寄りには井戸があり、その水位は高く、水量は豊富である。

なお、昭和の初め頃にはこの場所に豆腐屋が建ち、店の前には東西方向の細い道があり、往来は多かったとのことである。^{出典}

第2節 調査の概要

1. 調査の概要

平成30年8月1日にグリッド杭を打設して調査前の地形測量を行い、8月2～28日の間、12日間を要して調査を実施した（写真2）。

試掘調査では表土直下で遺構面を検出したことから、まず重機を使用して表土を除去し、人力による遺構面の精査をおこない、各遺構の掘削をおこなった。遺構の掘削方法に関しては、ピットは段掘りを行い柱痕の有無を確認した後に半截し、土坑や溝は適宜畦を設定して掘削し、それぞれ土層図を作成して写真撮影を行った後に完掘を行っている。

遺構の概略は以下のとおりである。

- ① ピット群 大小のピットを多数検出し、ピット列2本（SA100、SA101）を復元した。
- ② 土坑 6基（SK11、SK12、SK20、SK29、SK39、SK63）検出した。時期、性格とも不明のものが多い。
- ③ 溝 3本（SD04、SD05、SD33）検出したが、そのうちSD04とSD05は現代のものと思われる。
- ④ 井戸（SE59） 息抜きの竹^{出典2}1本を検出した。
- ⑤ 道（SF73） 調査区南辺の一段下がる平坦面で、表面の硬化から道と思われる。



写真2 作業風景



写真3 調査指導風景

⑥性格不明の遺構（SX01） 不整形な落ち込みで、調査区外に続いている。

⑦その他 当遺跡の南西隅で旧大橋川に関連すると思われる砂の堆積層を確認した。

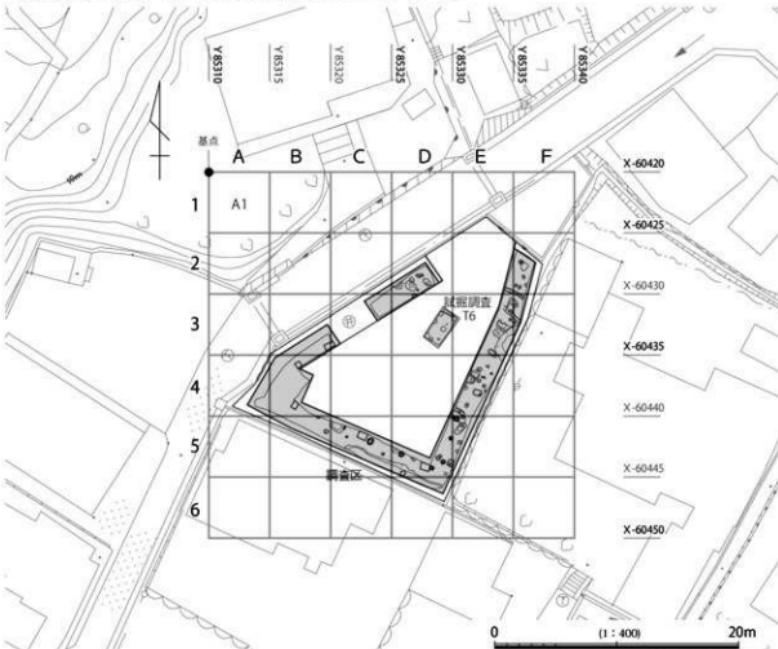
旧地形を復元するため、砂層の広がりと深さについて調査を行うこととしたが、掘削深度が工事での影響範囲よりも深くなることから、サブトレーンチを5カ所（T1～5）に設定して部分的に、旧大橋川の汀線の検出に努めた。¹³

本遺跡から出土した遺物は、縄文土器片1点、須恵器片20点、近世土師器片5点、陶磁器片13点、石製品1点のほか、木製品コンテナ1箱、瓦片コンテナ3箱分である。

なお、本調査については、ピット群の半蔵がほぼ終了し、旧大橋川岸辺と考えられる砂層を確認した8月17日に、島根県教育庁文化財課から現地調査について指導を受けている（写真3）。

2. 調査区とグリッドの設定

調査区は擁壁設置予定地を対象とすることから、台形の土地の周縁部に細いトレーンチを廻らせた不整形な形で、調査を行う深さにも擁壁の掘削深までという制限があった。また、調査区が接している水路を保護するため、調査区の西に沿う水路からは50cm幅、東と南を流れる簡易水路からは20cm幅の緩衝地帯を残し、井戸の周辺も調査対象から外している。



第6図 調査範囲・グリッド設定図 (S = 1:400)

調査あたっては、世界測地系の第Ⅲ座標系に基づき、座標軸に沿った5m四方のグリッドを設定している（第6図）。基点をX = -60420, Y = 85310とし、東に向てアルファベット、南に向てアラビア数字を与え、各グリッドの名称はアルファベットとアラビア数字を組み合わせた名称とし、遺構等に伴わない遺物はグリッドごとに取り上げを行っている。

3. 基本層序（第9・10図）

本遺跡は標高3.1～3.9mの緩斜面にあり、南西方向が低い地形にある。

基本層序は土層の途切れが少ない調査区南辺F-G中心に観察すると、上から

第I層、表土（現代の耕作土で、一部客土を含む）…第9・10図1層

第II層、近世末以降の堆積土（1820～60年代の陶器を含む）…第9・10図9～29層。

第III層（1面基盤層）、時期が確定できない、暗褐色砂質土を中心とする締まった層

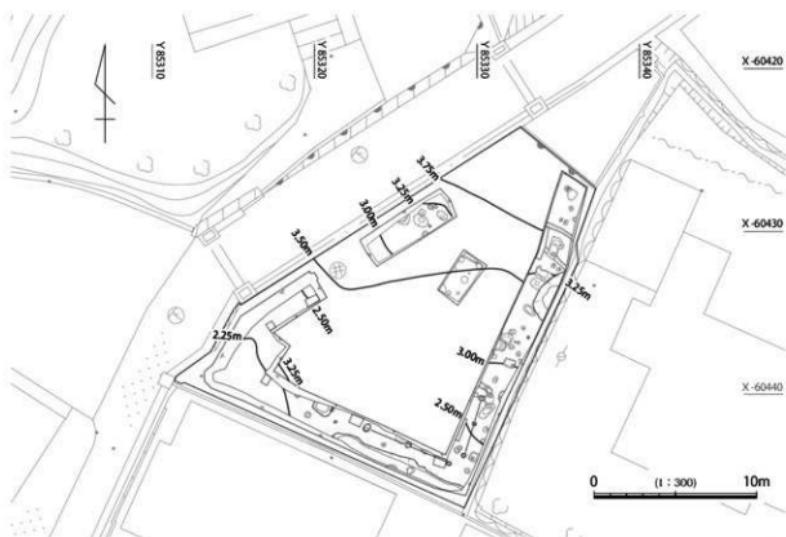
…第9・10図34～36層。

第IV層（2面基盤層）、時期が確定できない、硬質の層…第9・10図41～50層・76～78層。

第V層、縄文時代前期初頭以降の砂層…第9・10図79～85層。

第VI層、地山…第9・10図86層となる。

また、34、35層の上面が標高2.85mと水平に近く、若干西に向て下がっている。34、35層上面に赤貝が敷かれ（12、14層）、34、35層の上面から井戸（SE59）が掘られているので、34、35層の上面が1つの遺構面（第1遺構面）と捉えられる。34、35層は砂質の締まった層で、直上の9層か



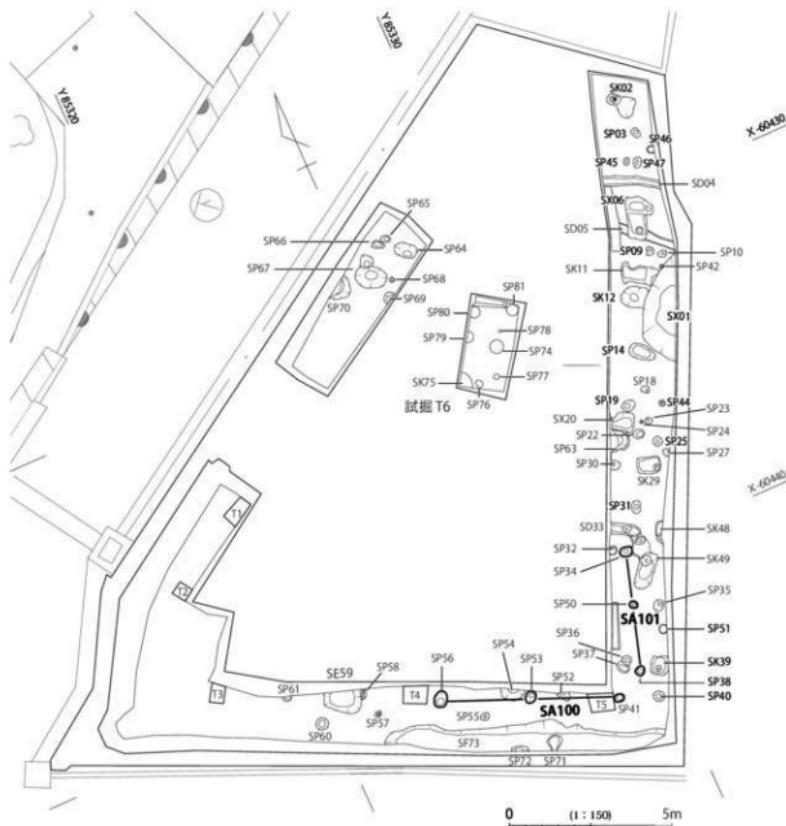
第7図 調査成果図・コンタ測量図 (S = 1:300)

ら出土した磁器（第19図9）が九陶V期（1820～1860年代）であることから、その時期以前の遺構面と判断される。

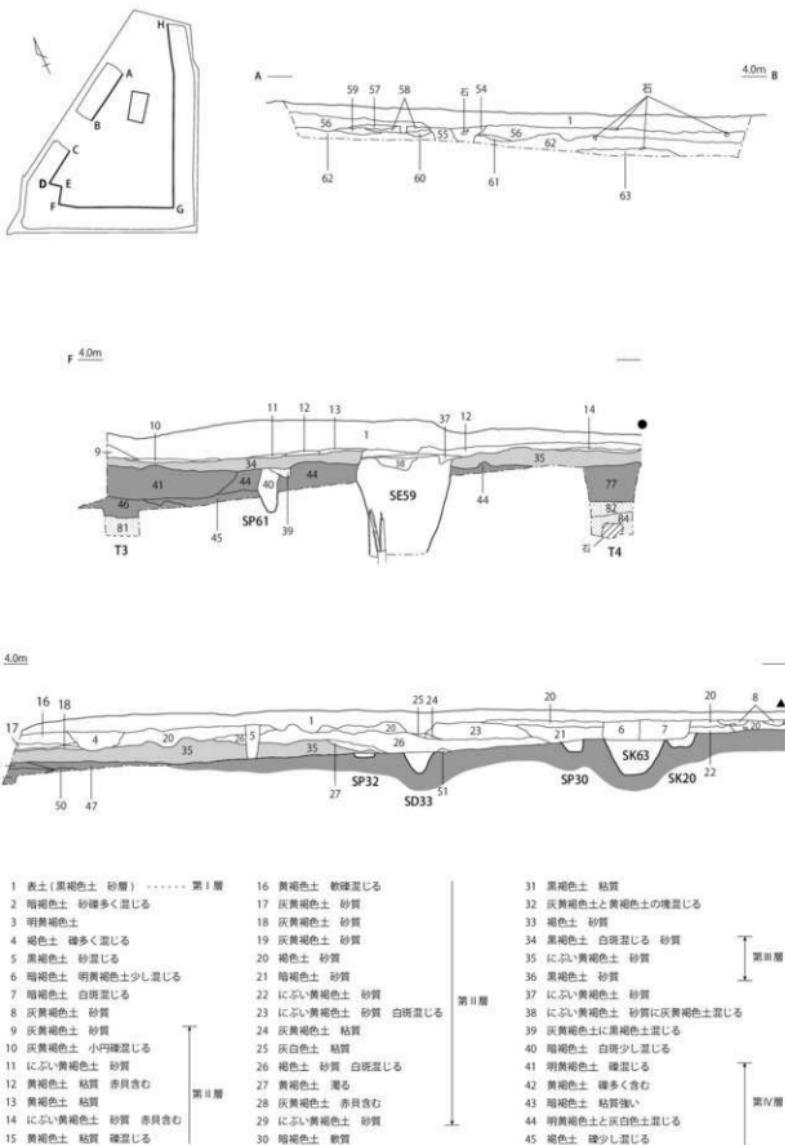
さらに、34、35層の下に位置する44層の上面も標高2.7mの水平な面であり、44層上面から掘り込まれたピット（SP61）が存在し、44層の上面と標高同じにする層（41～43層など）も同じ遺構面（第2遺構面）と捉えられる。この遺構面の時期は不明である。

前述したとおり本遺跡の南端付近では2面の遺構面が見られるが、北方では1つの遺構面しかみられない。基盤層上面の土質から、第2遺構面が続いているものと推測される。

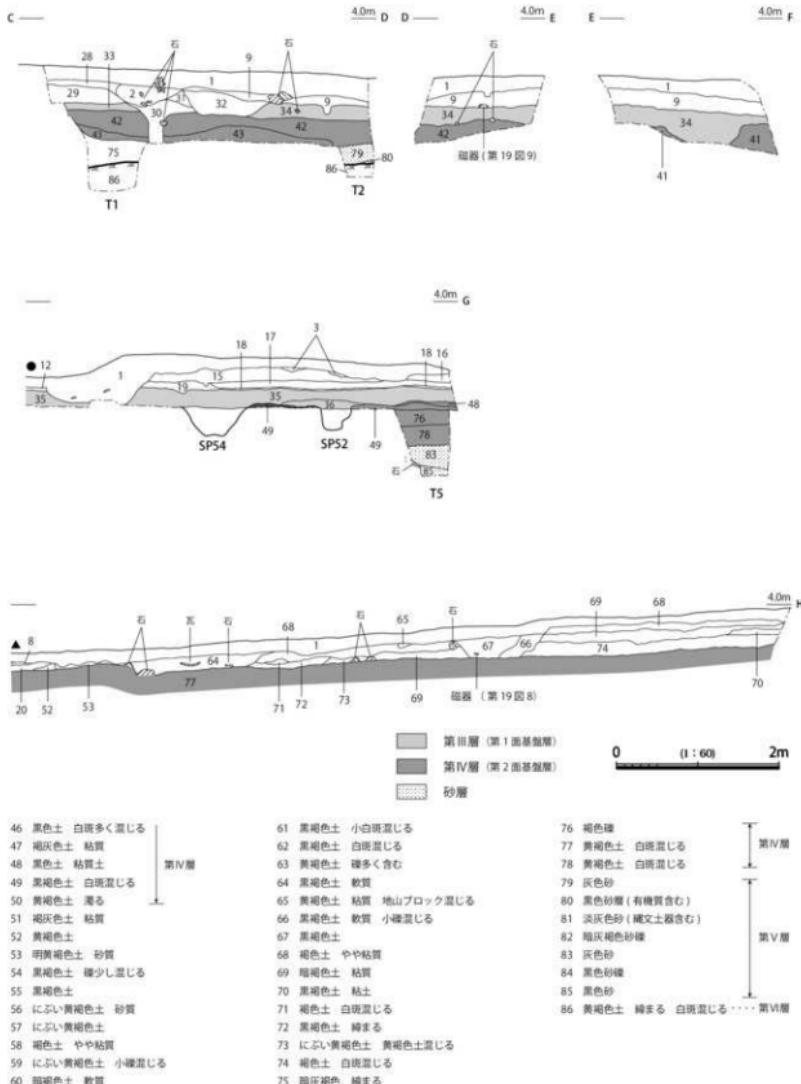
第V・VI層については、第3章第4節（23頁）で改めて詳細を述べる。



第8図 調査成果図 (S = 1:150)



第9図 調査区セクション図(1) (5 = 1:60)



第10図 調査区セクション図(2) (S = 1 : 60)

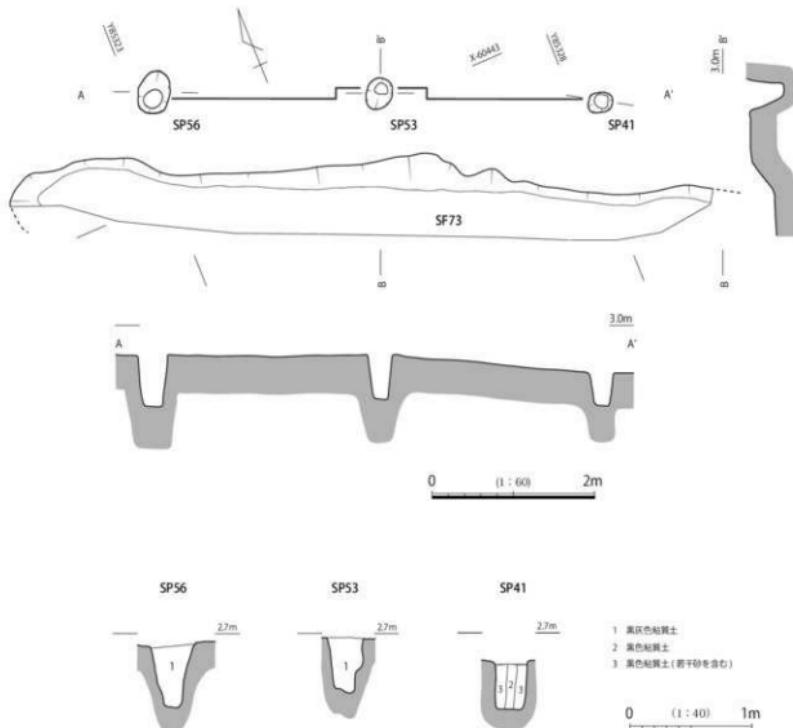
第3節 遺構と遺物

1. 遺構

遺構は、ピット列2本(SA100, SA101)、性格不明の遺構(SX01)、井戸跡(SE59)、道路遺構(SF73)のほか、ピット47基と土坑9基を検出した。

上記のほかに溝(SD04, SD05, SD33)も検出しているが、SD04とSD05は塩ビ製の排水管が並走しており、溝埋土が非常に軟弱な状態で明らかに近年のものである。また、電柱跡や電柱控線の土坑(SK02, SX06, SK11)もあり、SK02の埋土からは二次的に混入したと思われる土師器皿片(第19図1)が出土している。多数検出したピットや土坑は、埋土が軟質なものが含まれており、現代の遺構が混在している可能性も考えられる。

第1表の遺構観察表にはすべての遺構を例挙しているが、ここでは近世以前もしくはその可能性がある遺構について述べる。



第11図 SA100・SF73 遺構図 (S = 1:60・S = 1:40)

①ピット列 SA100 と道路跡 SF73 (第11図)

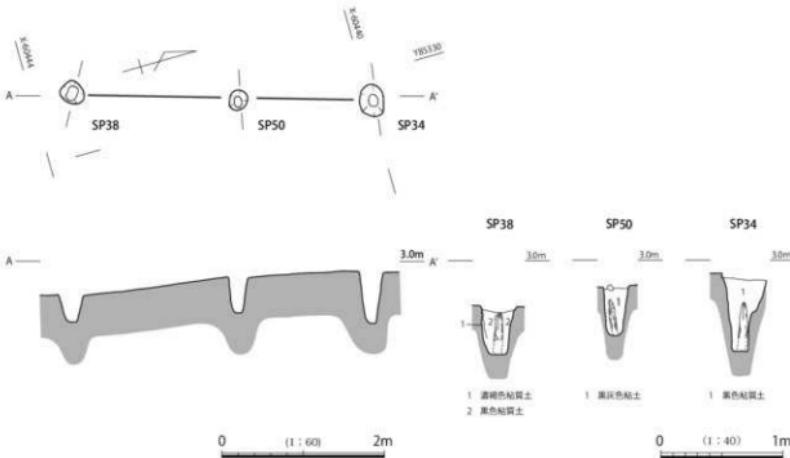
ピット列 SA100 は、調査区南辺で SP41、SP53、SP56 が直線上にならぶ。ピット間の芯々距離は SP41 — SP53、SP53 — SP56 とも 2.8m である。ピット面の標高は SP41 と SP56 が 2.05 m、SP53 が標高 2.10 m である。SP41 の半断面には径 7cm の柱痕が観察でき、柱痕埋土は黒色粘質土（若干砂を含む）で軟質である。SP53 と SP56 の埋土は単層の黒色粘質土で、これも軟質である。時期は不明であるが、この基盤層の上に九陶編年Ⅷ期（1820～1860 年代）の磁器を含む層（第 9・10 図 9 層）が堆積していることから、その頃かそれ以降に埋もれたと考えられる。

また、SA100 の南には約 20cm の段がついて下がる平坦面（東西 8.6 m 以上、幅 50cm 以上を検出）があり、SF73 とした。表面に硬化がみられることを根拠として東西方向の道路と考えている。側溝が検出されておらず、検出範囲が狭いため明確ではないが、硬化面には細片化した少量の貝殻の散布がみられる。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

SA100 と SF73 の境は、調査前も北から南に下がる法面であり層序による前後関係は把握できていないが、SA100 の軸と SF73 の下端が平行することから、両遺構は同時期に存在した可能性も考えられる。

②ピット列 SA101 (第12図)

調査区東辺で SP34、SP38、SP50 が直線上にならぶ。ピット間の芯々距離は SP38 — SP50 が 2.05m、SP50 — SP34 が 1.65m である。このうち SP34 の深さが 64cm あり、ピット底面の標高は SP34 が 2.36 m、SP50 が標高 2.5 m と近似していることから、本来は南の基盤がもう少し高かったのかもしれない。すべてのピット内に丸木の柱が残存しており、柱の直径は 8～10cm で、端部に特



第12図 SA101 遺構図 ($S = 1:60 \cdot S = 1:40$)

別な加工はみられなかった。ピット埋土は黒色粘質土、または黒灰色粘質土で軟質である。

時期は、SP38 埋土から須恵器の破片が出土しているが、SP34 から近世以降の土師器の皿が出土していることから、近世以降である。^{II-4}

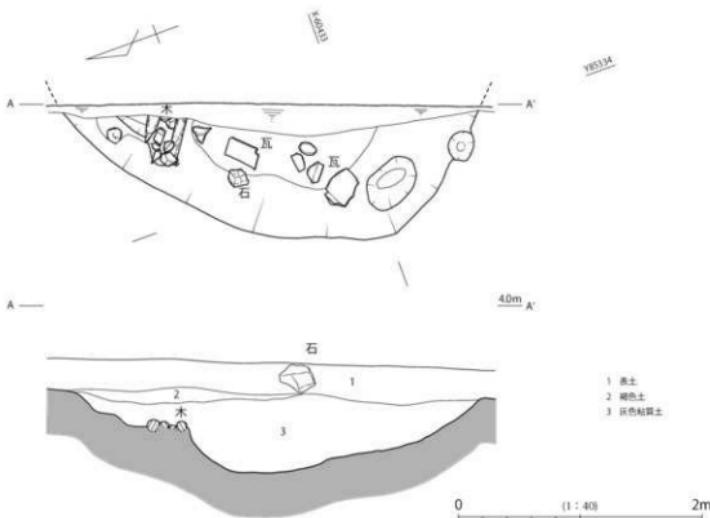
③性格不明の遺構 SX01 (第13図)

東辺の表土直下で検出した落ち込みで、大半は東の調査区外にある。調査区内の平面プランは不整形な半円形を呈し、最大幅 3.35m、壁の断面は緩やかに下り、深さ 60cm である。埋土は上から褐色土、灰色粘質土層の 2 層があるが、灰色粘質土で一度に埋め戻されたものと思われる。調査時は湧水が著しく、北寄りの浅いところでは丸材 4 本が同じ高さで横に並べられた状況で出土した。性格は不明である。

遺物は、須恵器破片 1 点 (第18図1)、17世紀初頭の中国青花の小破片 1 点 (第18図3)、九陶編年V期 (1820~1860年代) の磁器破片 1 点 (第18図2)、瓦片 20 点程度 (第18図4~6ほか) が出土した。したがって、この落ち込みが埋没した時期は 1820~1860 年代以降である。

④井戸 SE59 (第14図)

北半分は調査区外にあり、南半分だけを検出した。平面プランは隅丸方形または不整形な円形で、一辺 (直径) 1.1m を測り、壁を保護する施設はみられない。深さは検出面から 1m 以上はあるが、掘りきっていないため不明である。埋土は周囲の硬い土ををほぐしたような灰褐色土 1 層で、一度



第13図 SX01 遺構図 (S = 1:40)

に埋め戻されている。遺物は小さな瓦片が少量出土したほか、半截した壁際から1本の竹が出土しており、いわゆる息抜きの竹である。

時期は不明だが、層序（第9図）から19世紀前半以降と考えられる。

⑤ピット群（第15～17図）

ピット列SA100を構成するピット3基とSA101を構成するピット3基のほか、47基のピットを検出した。ピット総数は53基である。

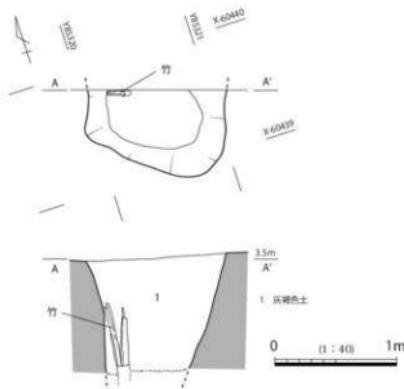
これらのうち、注目されるのは調査区の北西（D2グリッド／第6図参照）にあるピット群である。特にSP64の半截では直径20cmの柱痕跡が観察でき、土師器の皿破片（第19図2）が出土した。また、SP70は柱痕跡が明確ではないが、手捏ねの土師器の皿破片（第19図3）が出土しており、近世でも比較的早い時期のものと思われる。18世紀以降の陶磁器がみられないことから、この辺りに近世初期頃の建物が存在していたことが想定される。

上記以外は概して小型のピットが多く、半截で柱痕が分かれる柱穴（SP22、SP25、SP64、SP72）、柱痕は見えないが柱穴の可能性があるもの（SP31、SP54、SP60、SP61、SP70）、その他判断がつかないもの（上記以外）がある。

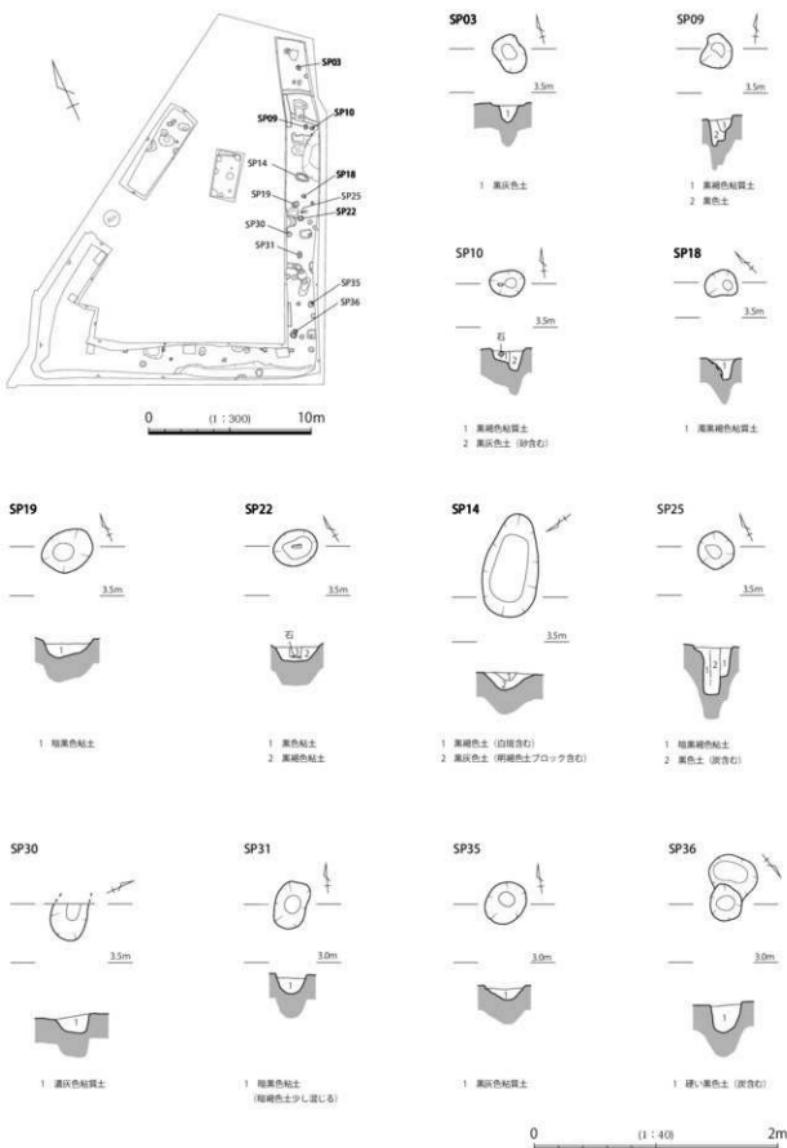
埋土中に遺物が混入するものもあり、SP09からは須恵器の小片、SP14からは須恵器と土師器の小片、SP60からは須恵器の小片が出土している。

⑥土坑群（第17図）

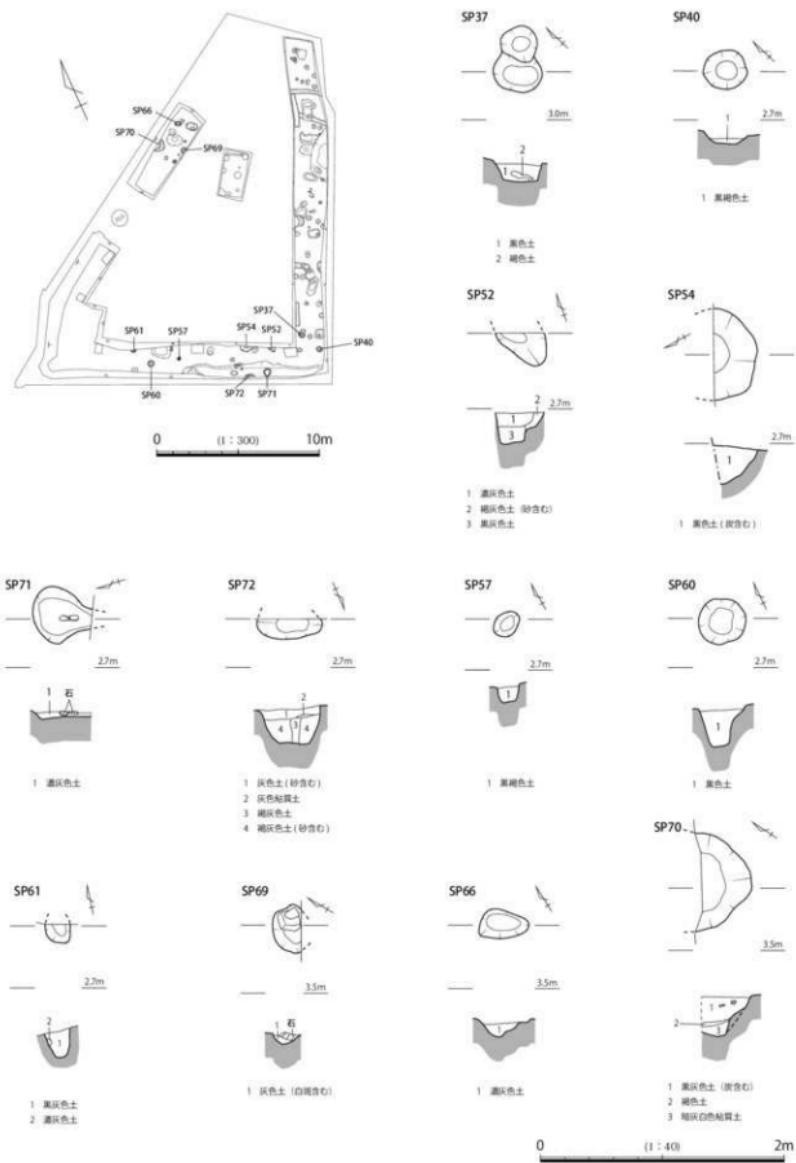
近世以前またはその可能性がある土坑としては、SK11、SK12、SK20、SK29、SK39、SK63を検出した。SK11とSK29の平面プランは方形に近い。SK12以外は浅いものばかりで、埋土の変化が少ない。SK20からは須恵器の小片が出土している。

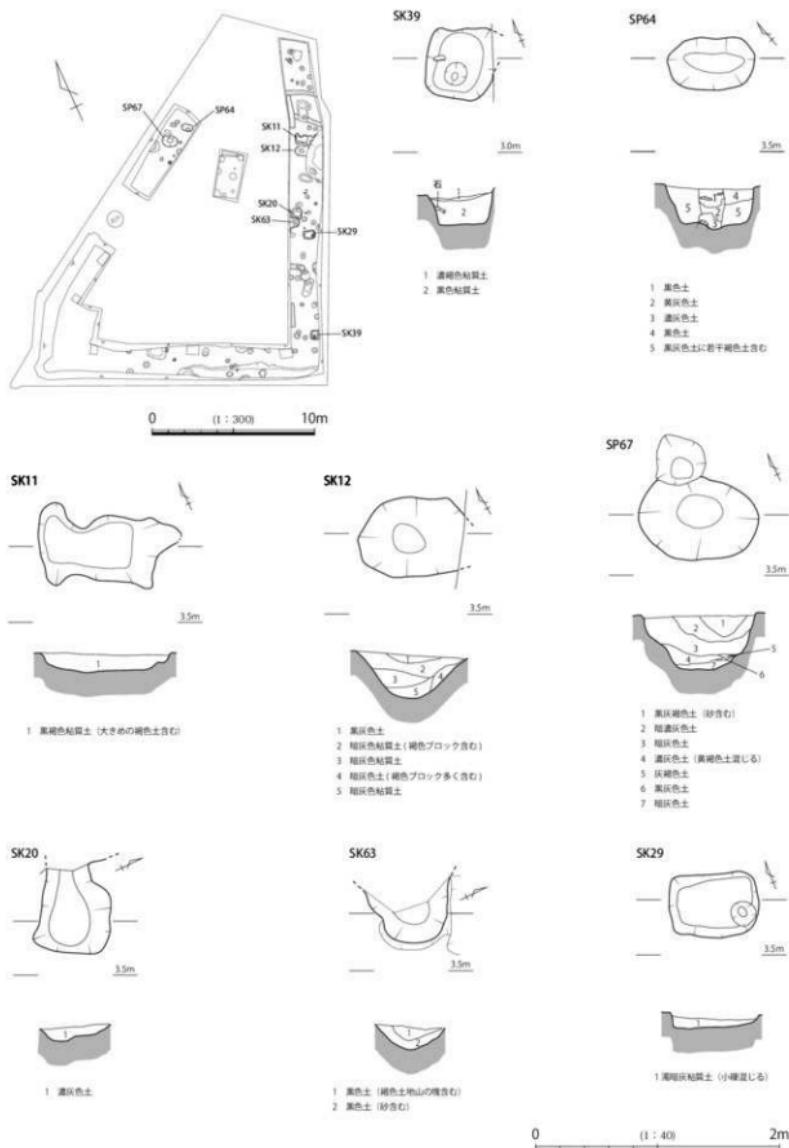


第14図 SE59 遺構図 ($S = 1:40$)



第15図 遺構平面・断面図(1) (S = 1 : 40)

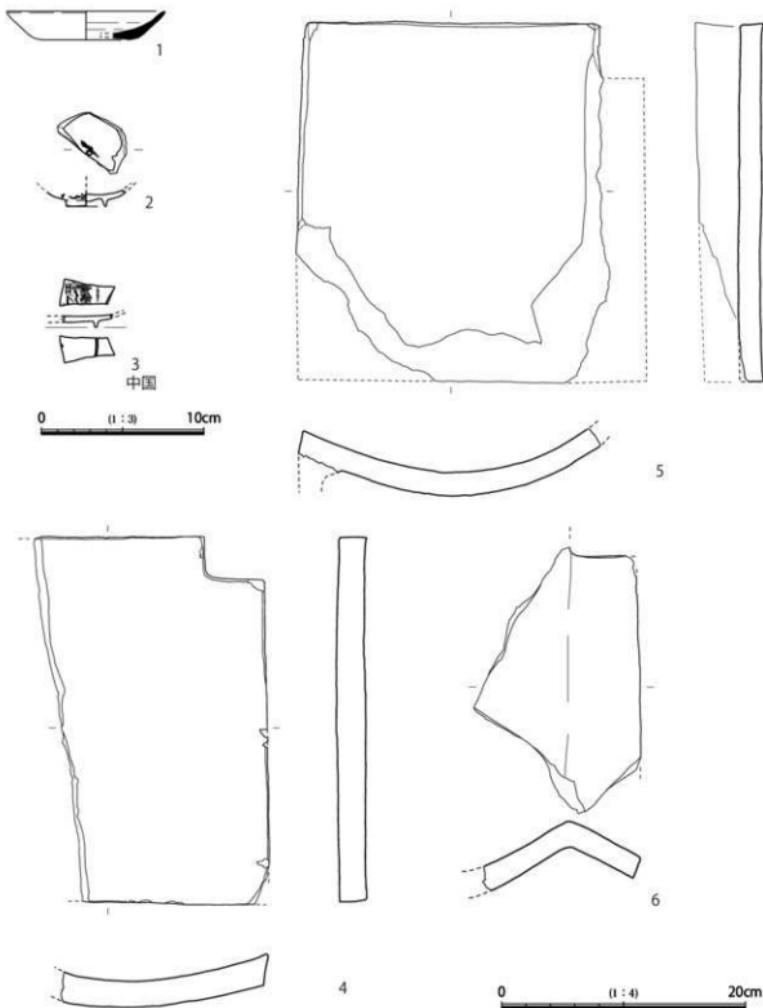
第16図 遺構平面・断面図(2) ($S = 1 : 40$)



第17図 遺構平面・断面図(3) (S = 1 : 40)

2. 遺物

第18図1～6はSX01から出土した。1は焼きがあまい須恵器の皿で、内面に回転ナデが施されているが、風化が著しい。口径9.8cm、底径5.3cm、器高1.8cm。2は肥前系磁器の碗で、見込みに雁文が描かれており、九陶編年V期（1820～1860年代）に相当する。3是中国青花の皿で、豊付は無

第18図 遺物実測図 (1) ($S = 1:3 \cdot S = 1:4$)

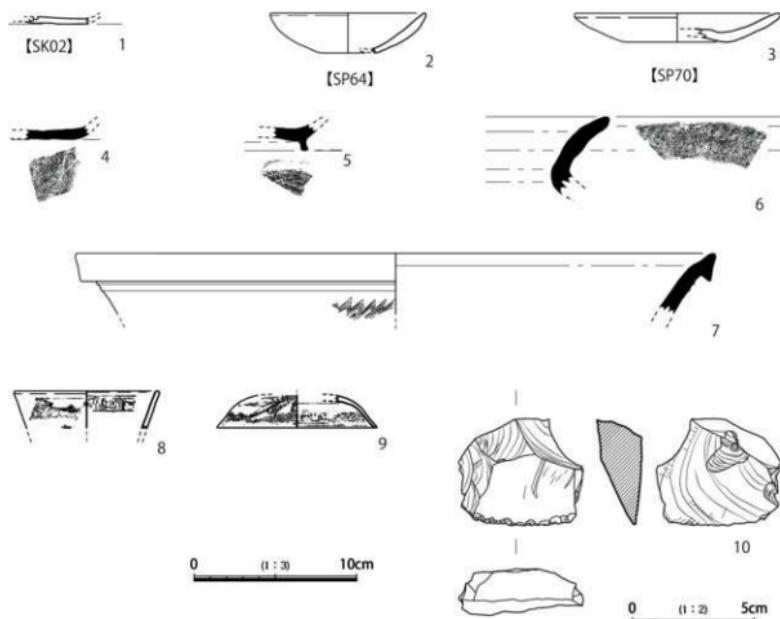
釉で砂粒が付着している。見込みと底の外面に文様が施されているが、小片のため詳細は不明である。小野分類の青花皿E群と思われ、17世紀初頭～前半に相当する。4、6は棟瓦、5は袖瓦である。

第19図1は、SK02から出土した、土師器の皿の底部と思われる。風化が著しい。2はSP64から出土した、土師器の皿の器壁部分である。口径9.6cm。3はSP70から出土した、手捏ねの土師皿である。口径12.6cm、底径6.5cm、器高1.8cm。

第19図4～7、10は表土中、8は第9・10図67層、9は第9・10図9層から出土したもの。4は須恵器の杯で、底外面に回転糸切痕が残る。5は須恵器の高台付杯で、底外面に回転糸切痕が残る。6は須恵器の甕の口縁部で、外面には回転ナデを施す前に平行叩きを施した痕跡が残る。7は須恵器の大型の甕の口縁の一部である。口径39.2cm。

8は肥前の磁器、染付の碗で、内面の口縁直下には雷文の一種、外面には遠山文が描かれており、九陶編年V期（1820～1860年代）に相当する。口径9.0cm。9は肥前の磁器の端反碗の蓋で、内面には團線と雷文、外面には流水文と草花文が描かれており、九陶編年V期（1820～1860年代）に相当する。口径9.8cm。

10は石器である。黒曜石製のスクレイバーで、直線に近い辺に片側から連続押圧剥離を施して4.2cmの刃部を作りだしている。縦4.4cm、横5.0cm、最大厚1.3cm、重量22.0g。



第19図 遺物実測図(2) (5 = 1:3・8 = 1:2)

第4節 旧地形の調査

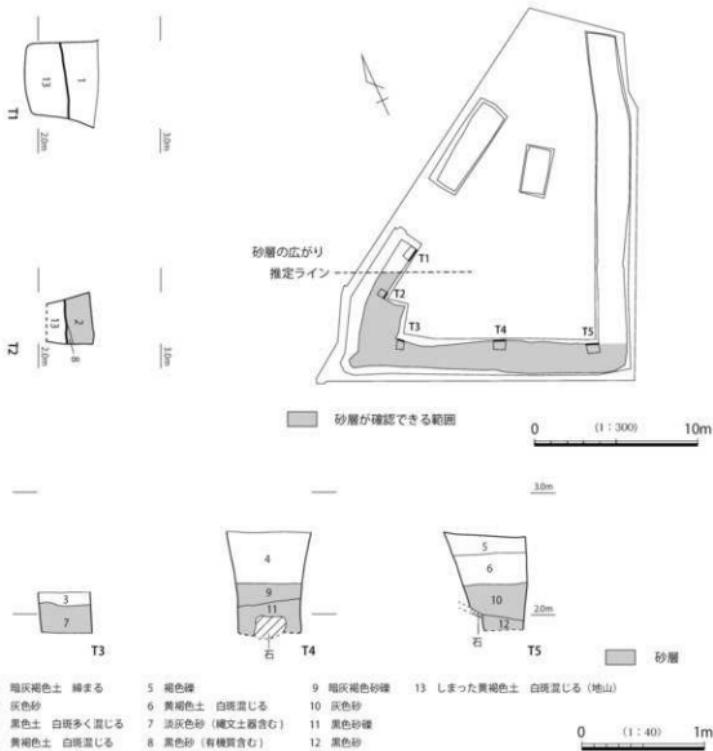
1. 調査の内容と方法

調査区南西隅でやや深めに掘り下げを行ったところ、水がにじむ砂層の上面を検出した。この砂層については、旧大橋川の水際にあたる可能性が考えられた。そこで、その範囲と標高について調査を行うことにした。しかし、本調査区では掘削深さに制限があるため、調査区の南寄りに5ヶ所のサブトレ（T1～T5）を掘り旧地形の復元を試みた。

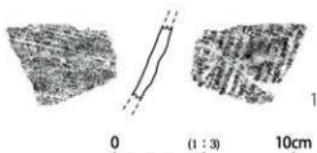
2. 調査の結果

① T1 暗灰褐色土（1層）の下層、標高2.2mに縮まった黄褐色土 白斑混じる（13層／地山）があり、砂層はみられない。

② T2 標高2.44mに灰色砂（2層）の上面があり、下方の一部には有機質を含む黒色砂（8層）がみ



第20図 T1～T5での砂層検出状況 (S = 1:40)



第21図 遺物実測図(3) (S=1:3)

られた。地山(13層)が確認でき、その上面は標高2.2mである。狭い調査区であるが、砂層の厚さはT1方向に向けて薄くなることが確認できた。

③ T3 黒色土 白斑多く混じる(3層)の下で、標高2.08mで淡灰色砂(7層)の上面を検出した。深さ24cmまで観察したが、砂層が深く湧水が著しいため地山までは掘削していない。

7層からは縄文時代前期中葉の土器片が1点出土した(第21図1)。器面調整の残りが良いことから、近くの遺跡から流されてきたものと思われる。

④ T4 黄褐色土 白斑混じる(4層)の下、標高2.26mに暗灰褐色砂礫(9層)の上面があり、標高2.1mに黒色砂礫(11層)の上面が見られた。地山までは掘削していない。

⑤ T5 褐色礫(5層)、黄褐色土 白斑混じる(6層)の下、標高2.24mに灰色砂(10層)の上面があり、標高2.0mには有機質を多く含む黒色砂(12層)の上面が見られた。地山までは掘削していない。

3. 出土遺物

第21図1はT3の淡灰色砂(7層)から出土した土器片である。小片のため明瞭でないが、縄文時代の深鉢と思われる。内面は二枚貝腹縁による浅い条痕、外面は斜行縄文(LR)が施されている。縄文時代前期中葉の羽島下層Ⅲ式に相当すると考えられる。

4. 小結

南北方向に配置したT1～T3をみると、T1とT2の間で砂層堆積が始まると推測され、T3で砂層が深くなる様子がうかがえる。ちなみに、この地点は最寄りの大橋川河岸から50mの地点である。また、T3の東のT4とT5では砂層が2層に分かれ、下層では礫や有機質が多い状況がみられた(11・12層)。この砂層が堆積した時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉かそれ以降である。

現在の大橋川の水位は標高0.22mであり、縄文時代前期中葉ごろの土器を出土した砂層とは1.86m～2.22m余りの高低差があり、これまでの海進データとは大きな開きがある。今回の砂層が大橋川に由来するものか、遺跡北側の谷に由来するものは明らかにできていないため、出土した事実を記載し、今後の検討にゆだねたい。

【第3章 註】

1. 地権者、松浦郁雄氏からおうかがいした話による。
2. 井戸を埋め戻すときに、井戸に「息抜きの竹」を残す慣習があり、現代でも塩ビ管等で行われることが多い。
3. 島根県教育庁文化財課の調査指導のもとに実施した。
4. 土師器の皿は体部の小片で図化できなかったため、報告にとどめた。
5. 2019年12月9日14:30時点の計測値。潮回り中潮、境の満潮時刻13:24・*.干潮時刻06:29・18:07。
6. 中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・三瓶良和・高安克己・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡辺正巳「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡(口給1～3層解説)」『LAGUNA(汽水域研究)3』1996年3月

第4章 総括

本遺跡の発掘調査は擁壁工事に伴う調査であったため、調査区は台形の土地の周縁部に細いトレーンチを廻らせた不整形な格好であった。このため、ピットを検出しても建物跡等の復元は難しい状況である。また、擁壁の設置深度までを調査対象としたので、本調査においても地山まで掘削することはできなかった。ただし、旧地形を復元するための調査が必要になり、最小限のサブトレーンチの掘削で対応している。

以下では今回の調査成果を要約記述するとともに、地域の歴史の中での位置づけや課題を整理してまとめとしたい。

1. 遺構と遺物

遺構はピット 53 基と土坑 9 基、性格不明の落ち込み (SX01) 1 基、井戸 (SE59) 1 基、道路 (SF73) 1 本を検出し、ピット列 2 本 (SA100, SA101) を復元した。

遺構面は 2 面あり、上の第 1 遺構面の時期は、遺構面を覆う堆積層に含まれた磁器（第 19 図 9）の年代から 1820 ~ 1860 年代かそれより古いと考えられ、下の第 2 遺構面の時期については不明である。今回の調査では第 1 遺構面を平面的に検出することはできおらず、壁面にかかる遺構をみると確実に第 1 遺構面といえるのは井戸 SE59 である。

復元した柱列 SA100 と SA101 は第 2 遺構面に属するもので、調査区外に続く掘立柱建物を構成する可能性も考えられるが、今回の調査では分からなかった。SA101 の柱穴には全て木材の柱根が残っており、両柱列を構成するピットの埋土は柔らかいものであった。

柱列 SA100 の南には、SA100 の軸と平行する北から南に約 20cm 下がった平坦面 SF73 が検出され、表面の硬化から東西方向の道路跡と推定される。

調査区の北西部で検出した柱穴 2 基 (SP64, SP70) は他のピットと比べて埋土が硬いものである。SP64 埋土からろくろ成形の土師器の皿の小片が出土し、SP70 埋土から手捏ねの土師器の皿が比較的大きな破片で出土したことから、年代は 17 世紀前半かそれ以降と考えられる。平面プラン楕円形の柱穴は松江城下町遺跡で検出されるものに近似している。

朝酌矢田遺跡はいわゆる朝酌促戸の島根半島側に位置しており、『出雲国風土記』の記載や試掘調査の結果から、当初は古代に関連する遺構の検出が期待されたが、本調査では明確に古代と判断できる遺構はみつからなかった。

遺物は小片が多いものの、縄文時代の土器 1 点と石器 1 点、古代は須恵器 25 点と土師器 3 点、中世の瓷器 2 点、近世初頭の陶磁器 2 点、近世末の陶磁器 11 点と瓦コンテナ 3 箱分が出土している。遺物の量が少ない割には、各時代の遺物が出土していることは、朝酌矢田遺跡では縄文時代から現在まで連続と人々の生活、活動が続いてきたことを示唆するものと考える。

2. 旧地形の復元

遺構面をサブトレンチでさらに深く掘り下げた結果、4ヶ所について標高2.08m～2.44mで砂層の上面を検出し、ここから縄文時代前期中葉頃の土器片1点が出土した。砂層は縄文海進時の大橋川汀線を示す可能性を考えたが、現在の大橋川の水位は標高0.22mであり、砂層の上面とは1.86m～2.22m余りの高低差があることや、これまでに発表されている縄文時代の海進データとは大きな開きがみられた。丘陵谷部の流路の可能性もあるが、今回は小トレンチでの確認であり、その性格は不明といわざるを得ない。今後のデータの蓄積を待ちたい。

さて、松江市内の縄文時代の遺跡は当時の中海や宍道湖の縁辺部に集中した分布がみられるが、近年の発掘調査によって大橋川縁辺部でも新たな遺跡が見つかりつつある。大橋川南岸の官道下遺跡では晩期～後期の遺物の自然流路から出土した状況が報告されたほか^{II-1}、北岸の朝酌菖蒲谷遺跡低地部では中期末～後期初頭のドングリ貯蔵穴1基、福富松ノ前遺跡では後～晩期の遺物包含層、シコノ谷遺跡では早期～晩期の遺物包含層が検出されており、現在整理作業が行われている最中である。また、若宮谷遺跡では一部の現地調査が終了し、晩期の遺物包含層が確認されている^{II-2}^{II-3}。今後、各遺跡の調査成果が報告され、朝酌川縁辺部の縄文時代の様相が明らかにされることを期待している。

【第4章 註】

1. 島根県教育委員会『官道下遺跡・灘遺跡』2017年3月
2. 広江耕史氏のご教示による。
3. 内田律雄氏のご教示による。

第1表 遺構観察表

遺構名	グリッド	種類	長軸×短軸(cm) 深さ(cm)	平面形	備考	遺構名	グリッド	種類	長軸×短軸(cm) 深さ(cm)	平面形	備考
SK01	E3・F3	不明	34×8以上 46	円形	陶器(有地系)、実底器18-1 瓶底(IIIC前半)18-2、IIIC後半18-6 蓋面(Ⅲ・Ⅳ地盤・IIC初頭)18-3	SP46	F2	ピット	24×22以上 5	楕円形	
SK02	F2	土坑	90×64 33	不整形	上部器(Ⅲ)19-7 陶柱有り、現代遺構	SP47	F2	ピット	35×24 10	楕円形	
SP03	F2	ピット	32×23 13	楕円形		SK48	E4・E5	土坑	70×19以上 9	楕円形	
SD04	E2・F2	溝	177以上×29 10	—	現代遺構	SK49	E5	土坑	116×50 26	楕円形	直底器・土師器
SD05	E3・F3	溝	119以上×27 14	—	直底器(明治以降) 陶器(Ⅲ・Ⅳ地盤・有地系)、現代遺構	SP50	D5	ピット	24×22 42	円形	SA101 木柱有り
SK06	F3	土坑	131×84 30	不整形	陶柱有り、現代遺構	SP51	E5	ピット	24以上×30 4	円形か	
SP09	E3	ピット	28×25 23	楕円形	直底器	SP52	D5	ピット	40以上×27.0 35	楕円形	
SP10	E3・F3	ピット	38×22 17	楕円形		SP53	D5	ピット	38×32 43	円形	SA100
SK11	E3	土坑	118×67 19	不整形	現代遺構	SP54	D5	ピット	75×36以上 29	楕円形	直底器
SK12	E3	土坑	85以上×65 40	—		SP55	C5	ピット	30×25 24	円形	
SP14	E3	ピット	84×45 14	楕円形	直底器・土師器	SP56	C5	ピット	50×39 60	楕円形	SA100
SP18	E4	ピット	26×20 17	楕円形		SP57	C5	ピット	22×19 19	円形	
SP19	E4	ピット	42×33 14	楕円形		SP58	C5	ピット	32×15 32	楕円形	
SK20	E4	土坑	67以上×57 17	不整形	直底器	SE59	C5	井戸	93×64以上 96	楕円形 竹有り 瓦	直底器
SP22	E4	ピット	35×28 12	楕円形	平石か 柱頭あり	SP60	B5	ピット	38×36 35	円形	直底器
SP23	E4	ピット	24×20 15	円形		SP61	B4	ピット	27×16以上 22	円形か	
SP24	E4	ピット	11×11 15	円形	直底器(昭和)	SK63	E4	ピット	64以上×34以上 54	楕円形	
SP25	E4	ピット	30×30 38	円形	柱頭あり	SP64	D2	ピット	71×42 50	楕円形	土師器(Ⅲ)19-2 柱頭あり
SP27	E4	ピット	21以上×22 16	楕円形		SP65	D2	ピット	31×23 16	楕円形	
SK29	E4	土坑	73×51 9	楕円形		SP66	D2	ピット	39×22 19	楕円形	
SP30	E4	ピット	30以上×30 14	楕円形		SP67	D2	ピット	100×70 45	楕円形	
SP31	E4	ピット	38×26 12	楕円形		SP68	D2	ピット	16×16 8	円形	
SP32	D4・E4	ピット	24以上×30 5	円形か		SP69	D2	ピット	40以上×22 12	楕円形	
SD33	E4	溝	92以上×35 22	—	陶器(在地系粘土)	SP70	D2	ピット	79×32以上 49	楕円形	土師器(Ⅲ)19-3 柱頭あり
SP34	E4・E5	ピット	41×30 64	楕円形	SA101・木柱有り 直底器	SP71	D5	ピット	47以上×46 4	楕円形	
SP35	E5	ピット	36×31 16	楕円形		SP72	C5・D5	ピット	52×14以上 34	楕円形	柱頭あり
SP36	D5	ピット	30×25 25	楕円形		SP73	D5	道	860.0L×50.0L 30	千明	
SP37	D5	ピット	24以上×40 19	楕円形		SP74	D3	ピット	直径40 4脚	円形	直径器
SP38	D5	ピット	30×30 38	円形	SA101・木柱有り 直底器	SK75	D3	土坑	半径40以上 太脚	楕円形	直底器
SK39	D5・E5	土坑	55以上×58 28	楕円形 分		SP76	D3	ピット	直径20 4脚	円形	
SP40	D5	ピット	36×32 12	円形	瓦	SP77	D3	ピット	直径18 4脚	円形	
SP41	D5	ピット	29×23 39	楕円形	SA100 柱頭有り	SP78	D3	ピット	直径8 4脚	円形	
SP42	E3	ピット	12×12 8	円形		SP79	D3	ピット	直径35 4脚	円形か	
SP44	E4	ピット	20×19 35	円形		SP80	D3	ピット	直径35 4脚	円形か	
SP45	F2	ピット	24×19 5	楕円形		SP81	D3	ピット	直径35 4脚	円形	

※ ■ = 遺構名のアミカケは持団の掲載を示す

遺物観察表

第2表 遺物観察表

標示番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整・手法・文様の特徴	残存	備考
18-1	瓦窯器	盆	11坪(9.8) 底径(6.3) 高さ1.8	陶鉢粉含む	素手	外 黄褐色 内 黄褐色	外 調整のため手明 内 回転ナデ	20%	
18-2	磁器	碗	直径(2.5)	灰	真	—	外 染付 内 染付(墨文)	—	肥前、九胸V期 1820～1860年代
18-3	磁器	盆	—	青	真	—	外 染付(小山)のため文様は不明 内 染付	底部 50%	中国 17c 初頭～前半 青花磁玉器(小野分類)
19-1	土陶器	盆	—	陶鉢粉含む	真	外 陶鉢粉含む 内 陶鉢粉含む	外 調整のため不明 内 調整のため不明	底部 20%	
19-2	土陶器	盆	11坪(9.6) 底径(3.6) 高さ2.5	陶鉢粉含む	真	外 陶器～灰白色 内 陶器～灰白色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	25%	
19-3	土陶器	盆	11坪(12.6) 底径(6.5) 高さ1.8	陶鉢粉含む	真	外 黄褐色 内 黄褐色	外 静止ナデ 内 静止ナデ	20%	手捏ね
19-4	瓦窯器	坪	—	1mm前後の砂粒含む	真	外 黄色 内 黄色	外 回転ナデ、回転糾切 内 回転ナデ	底部 5%	
19-5	瓦窯器	高台付坪	—	1mm前後の砂粒含む	真	外 灰色 内 陶白色	外 回転ナデ、回転糾切 内 回転ナデ	底部 20%	
19-6	瓦窯器	甕	—	1mm前後の砂粒含む	真	外 陶器 内 黄色	外 平行タタキ後、回転ナデ 内 回転ナデ	口縁部のみ	
19-7	瓦窯器	甕	11坪(9.2)	陶鉢粉含む	真	外 黄色 内 陶白色	外 回転ナデ、沈綱、流状線 内 回転ナデ	5%	
19-8	磁器	湯呑	11坪(9.0)	灰	真	—	外 染付(墨文) 内 染付(墨文)	11幅部 5%	肥前、九胸V期 1820～1860年代
19-9	磁器	蓋	11坪(9.8)	青	真	—	外 染付(墨文、草花文) 内 染付(墨文、無縫)	30%	肥前、九胸V期 1820～1860年代
21-1	織文土器	深鉢	—	1mm前後の砂粒含む	真	外 黒色 内 黑褐色	外 回転糾文(注跡) 内 粗方網のナデ	5%	田島下原式

瓦

標示番号	種類	色調	法量(cm)	備考
18-4	平瓦	内 黒色 外 黒色	長29.8 厚2.4	
18-5	平瓦 (輪瓦)	内 黒色 外 黒色	長29.2 厚1.9	下巻部を吊り付けるためヘラで三条の筋を入れている
18-6	平瓦 (瓦端瓦)	内 黒色 外 黒色	—	18c 中古～現代

石製品

標示番号	種類	法量(cm・g)	石材	色調	備考
19-10	スクレイバー	範4.4 厚5.0 厚1.6 重220	黒曜石	黒色	唐鏡押注剥離による刃部長4.2cm

写 真 図 版





調査地全景（調査前）（北から）



調査地全景（調査後）（南西から）

図版 2



完掘状況①（北東から）



完掘状況②（北東から）



完掘状況③（北西から）

図版 4



完掘状況④（南西から）

図版 5



試掘調査 T6 遺構平面プラン検出状況（北から）



南辺 F - G ラインセクション（南西から）

図版 6



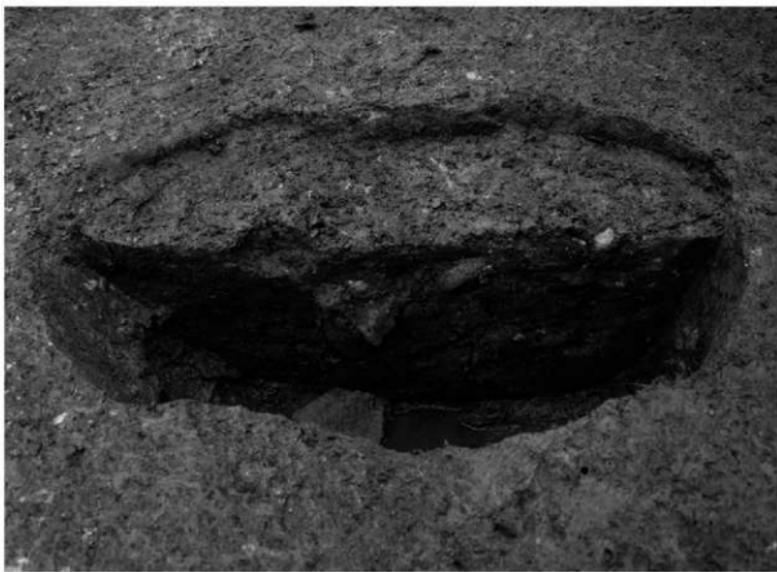
ピット列 SA100 と道 SF73（東から）



ピット列 SA101（北から）



柱穴 SP38 の柱根検出状況（南から）

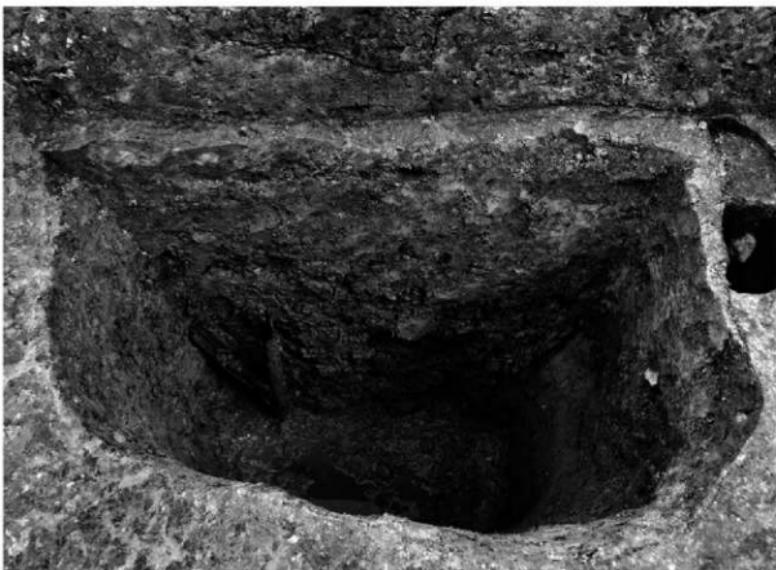


柱穴 SP64 の半観状況（南から）

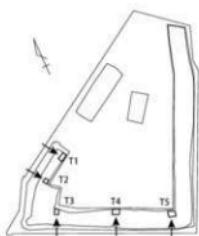
図版 8



性格不明の遺構 SX01 遺物出土状況（北西から）



井戸 SE59 半截状況（南から）



矢印は撮影方向

T1～5配置図



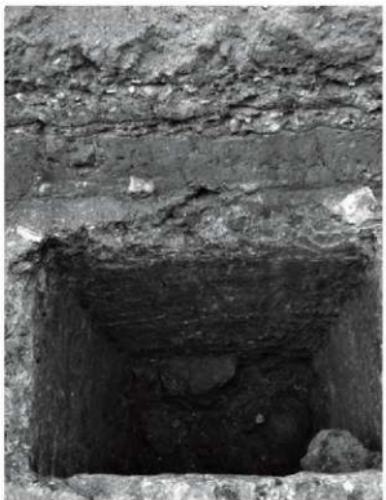
T1 土層断面



T2 土層断面



T3 土層断面

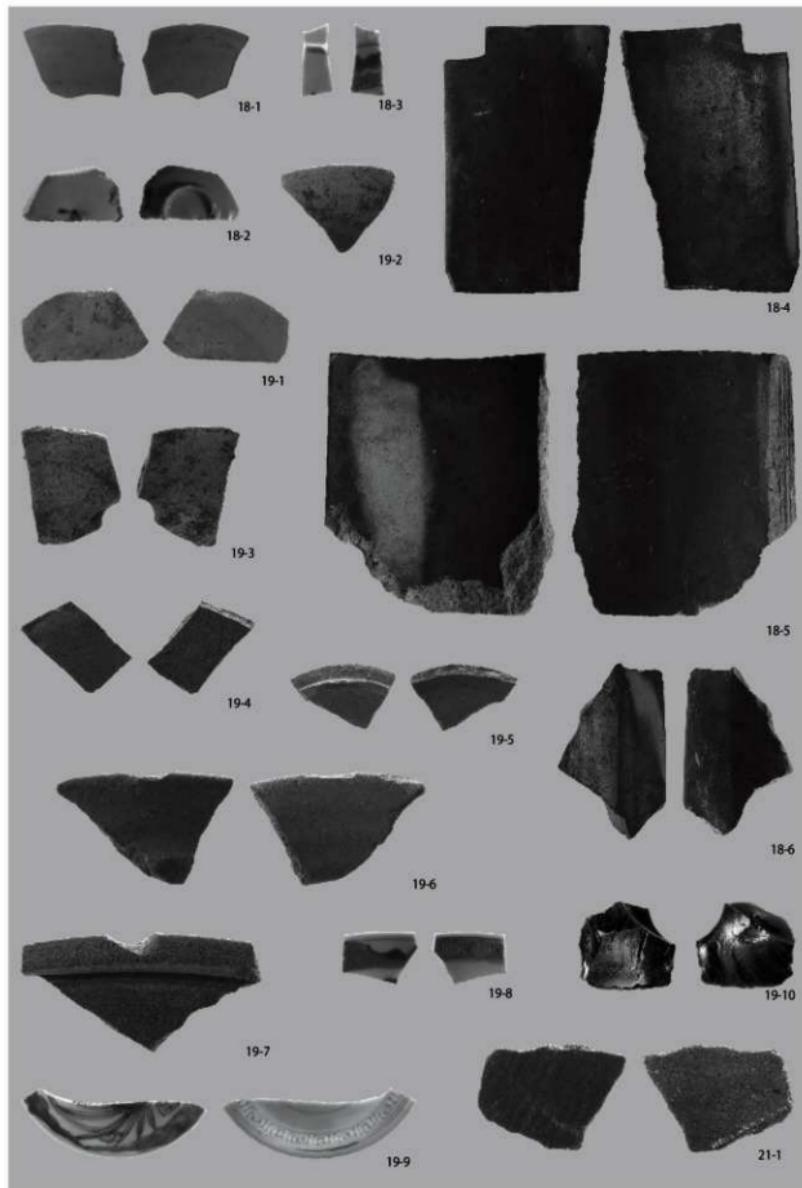


T4 土層断面



T5 土層断面

図版 10



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あさくみやだいせき						
書名	朝酌矢田遺跡						
副書名	大橋川改修に伴う個人住宅移転予定地内発掘調査報告書						
卷次	2						
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第193集						
編著者名	江川幸子・三宅和子						
編集機関	松江市 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL:0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 (埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL:0852-85-9210						
発行年月日	2019年12月						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
朝酌矢田遺跡	 島根県 松江市 朝酌 町 1084	32201	D-1885	35° 27' 06"	20180802 ～ 20180828	110.2m ²	宅地造成 住宅建設
				133° 06' 24"			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
朝酌矢田遺跡	集落跡	縄文 近世	柱列	縄文土器 須恵器 土師器 陶磁器 瓦	縄文土器を1点含む砂層を確認。		

松江市文化財調査報告書 第193集

大橋川改修に伴う個人住宅移転予定地内発掘調査報告書 2

朝 酬 矢 田 遺 跡

令和元(2019)年12月

発行 島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印刷 松栄印刷有限会社
島根県松江市西川津町 667-1
